〔いくしろ長吉〕

いくしろ長吉は本名を明石長吉といい、大正十五年頃七〇歳ぐらいの年齢で、鍛冶町に住んでいた。いくしろは屋号。いくしろ長吉は操船の技術に優れた漁師であった。とくに岸に打ち寄せる波の頃合を見計らって船を出すのが巧かった。そのため漁師たちは出漁のとき、いくしろ長吉を横目に見て、長吉が船を出すのに合せて、一斉に船を出した。このような長吉であったが、顔がたいへん醜かった。鼻がひっくり返って、しかも鼻穴がひとつしかないように見えた。そのため、本荘の町から魚の買付けにやって来た商人たちと酒盛りになり、長吉が酒を注ごうと側に寄ると、商人たちは、

「お相手せんさね」

と言って長吉を嫌ったという。いくしろ長吉の住んだ跡は小坂町、佐々木洋介〈松ケ崎字松ケ崎五七の一〉方に隣接している防火用水となっている場所であった。